あしなが発 905 号
2014 年 2 月吉日

2013 年中（暦年）のご寄付者のみなさまへ

あしなが育英会
会長　玉井義臣

「受領証明書」ご送付と事業報告ならびにお願い

・東日本大震災・阪神淡路大震災被災地のその後
・「子どもの貧困対策法」成立　―　本会出身下村文相の活躍
・減点主義から加点主義に教育方針を 180 度変革
・3/13 仙台、3/20 東京にて コラボコンサート開催
・ウガンダのエイズ遺児ヒルダさん、名門スミス・カレッジに合格

今年の冬はことのほか寒波が厳しく、東北で被災されたみなさまには 3 年目の厳しい冬がめぐってきて、すべての意味で大変さが私どもに伝わってくる今日この頃ですが、謹んで心からお見舞い申しあげる次第でございます。

ご支援者のみなさまにおかれましても、寒気と重税、波乱含みの近未来の中で昨 2013 年中も変らぬご支援を賜り感謝に堪えません。それ以降にサポーターになってくださった方々にも厚く御礼申しあげます。

東日本大震災・阪神淡路大震災被災地のその後

疲弊著しい東北被災地と震災遺児と今後どう向き合うか

東北の震災遺児は年末年始が大嫌いだ。あの 3 月 11 日が近づいてくるから。よその家とは違うさみしいクリスマスやお正月を過ごさなければならないから。一家団欒は消えて二度と戻らない。石巻のクリスマス会、「どんな会にしようか？」というふうに聞いた。すると「ケーキやサンタより、みんなで食べる焼肉できないの」と答えた。大きなテーブルで焼肉を大勢で食べるクリスマス会を催した。

3 年近くの月日が流れ、被災地は疲れ切っている。遺児やその保護者、被災者はもちろん、支援する側も疲れは隠せない。地元の役所も新聞社もみな元気がない。被災してマイナスに囲まれた日常が固定化した。

言動が乱暴になった男の子。笑顔が消えた少女。本来の機能を失いそうな危うい家庭が増えている。不登校、引きこもりが表面化している。

東北事務所・林田吉司所長（1 月 25 日記）

阪神大震災直後の取材と、19年目の遺族らの「愛する人を偲ぶ会」

毎年、阪神淡路大震災遺児家庭の追悼式「今は亡き愛する人を偲び話しあう会」を神戸レインボーハウスで開き、今年1月で19回目を迎えた。今では孫やわが子を抱いて参列する方も多い。今回は震災当時生後4か月だった遺児（19歳）が「亡き愛する人へのことば」を参加した90人の前で読み上げ、その姿に涙が止まらなかった。第1回から参列している私は、あしながさんやみなさまのお陰で、震災遺児らは見事に成長し、立派な大人となって巣立っていると痛感した。「神戸レインボーハウス」の経験と役割は貴重でとても尊い。

「子どもたちやあしながさんが心配や。確認してほしい」。思い返せば、震災が発生した1995年1月17日から4日後の21日、玉井会長から命を受け、職員・樋口と私、田中敏はあしなが奨学生らとともに寸断された道々を往き壊滅した神戸市街に急行。未だ戦禍のような火災や粉塵が舞い続けるなか、徒歩で「あしながさん」や「震災遺児」の安否確認や現状把握の活動に入った。夕刻、元町のある避難所・体育館を訪ねると、遺体安置所と同じくして人々が溢れかえっていた。「確認？どころやない。今夜から雨が降る予報やし、未だ埋まっている人たちの“命”が危ないんや。あんたも泊まるとこがないんやったら戻っておいで」、一見するが座れるスペースは無い。しかし緊迫するなか、責任者のおっちゃんはそう優しく言ってくれた。翌日、雨が降りそそぐ長田の商店街はまさに地獄絵図だった。

編集室・田中敏記者（1月27日記）

2013年の「受領証明書」をお届けいたします

さて、2013年1月1日から12月31日までのあなたさまからのご寄付の「受領証明書」をお送りいたします。多くの方からのご寄付に心から厚く御礼申し上げます。ご寄付合計額は52億4878万円となり、前年比約11%減でしたが、これは東日本大震災のための「特別一時金」が2年目に入り減少したものの、一昨年の3分の2を維持すると同時に、東日本大震災関連以外のご寄付は12%の増加となり、全体では震災以前に比べ2倍もの金額となりました。あしながへのご期待が一回りも二回りも増えた実感があります。本当にありがとうございました。大切に使わせていただきます。

2013年中にみなさまから寄せられましたご寄付額（2013年1月～12月）は次の通りです。

• あしながさん奨学金	13億9432万8676円	（昨年比102.5%）
• 使途を限定しない一般寄付	13億3046万7304円	（昨年比107.0%）
• 虹のかけはしさん	1億1369万8801円	（昨年比　89.7%）
• 海外遺児支援	5億　457万1195円	（昨年比 177.1%）
• その他	4116万3596円	（昨年比 476.1%）
小計	33億8422万9572円	（昨年比 111.9%）
• 東日本大地震津波遺児募金	4億　623万9595円	（昨年比　31.1%）
• 東北レインボーハウス建設募金	14億5831万4388円	（昨年比　93.4%）
小計	18億6455万3983円	（昨年比　65.2%）
合計	52億4878万3555円	（昨年比　89.2%）

東日本大震災・津波支援へのご寄付のご報告

① 特別一時金の給付について

2011年3月11日の東日本大地震・津波から3年目を迎えようとしています。本会は震災の2日後に津波遺児への特別一時金の給付を決定。そのスピード感と機動性ある発表、実行によって国内外から大きな評価を得ました。奨学金の貸与、心のケアのための活動費用と合わせて、「あしなが東日本大地震・津波遺児募金」を行ってまいりましたところ、募金額は2013年12月31日現在、61億4785万5916円（23万8384件）となりました。

いただきましたご寄付から「使途自由・返還不要」の「特別一時金」として零歳（新生児を含む）から大学院生までの2078人に一律282万1964円、遺児1人に200万円（※）、被災地の遺児奨学生への住宅一時金として1人あたり30万～50万円を168人に、合計59億2254万1192円を給付いたしました。残額につきましては、津波遺児の心のケアのための活動に充てさせていただきます。

※2013年3月の第4次増額時に遺児本人が亡くなっており増額分を給付していないため。

② 東北レインボーハウス建設について

東日本大地震・津波遺児とそのご家族に短期、長期の支援、出会い、交流の場、また、遺児たちに寄り添いケアする“ ファシリテーター” を養成する拠点として、仙台、石巻、陸前高田でレインボーハウスが間もなく完成します。

震災から3年目の3月11 日を、子どもと家族とファシリテーターと職員が、レインボーハウスで一緒に過ごすことができる予定です。仙台は全国の震災遺児支援のセンターとして、石巻と陸前高田は地域の遺児家庭支援の拠点として活動します。

2013 年12 月31 日現在、募金額は47億1740万5078円（4万4739 件）となり、目標としていた41 億5千万円を達成することができました。つきましては、2014年3月末をもって建設募金へのご寄付の受付を終了させていただきます。ご支援いただいたみなさまに心より感謝申しあげます。なお、目標金額を超えたご寄付につきましては、6年目以降の東北レインボーハウス運営費に充てさせていただきます。

「子どもの貧困対策法」成立 ― 本会出身下村文相の活躍

経済のデフレ化の中で遺児たちの貧困化は日に日に厳しさを増しています。あしなが育英会はこれを救うべく、様々な対策を考え、学生たちと共に運動を続けてきましたが、本会出身の下村博文文科相の活躍もあり「子どもの貧困対策法」の成立にこぎつけました。

以下、小河光治のレポートです。

高校生の給付型奨学金の新設

半世紀におよんで遺児らを支援してきた、あしなが運動の果実として、誇るべき法律が誕生しました。2013年6月19日、参議院本会議で子どもの貧困対策法案が全会一致で可決、成立。そして、2014年1月17日に施行されました。

子どもの貧困率は、15.7%で、326万人にものぼる子どもが貧困にあえいでいます。さらに一人親世帯の貧困率は50.8%で、OECD 32か国で31位と最悪のレベルです。「この子たちを放置しておけば、大人になっても貧困から抜け出せず、社会を支える側にまわることができない。貧困の連鎖を断ち切らねば、日本の未来に希望はない」と、本会の大学奨学生らが4年越しで制定を求めてきたこの法律は、下村博文・文部科学大臣の強力なリーダーシップで全政党・国会議員の賛成で誕生しました。

また下村大臣は、昨年末の「遺児と母親の全国大会」で来年度から国による高校生への給付型奨学金制度新設が決定したと発表しました。子どもの貧困対策の施策第1号としての効果が期待できます。

救われた遺児がまだ救われていない子どもたちのために支援を拡げてきた、あしながの恩返し運動がさらに大きく開花しました。長年にわたってご支援を続けてこられたあしながさんのみなさまに重ね重ねお礼申しあげます。

奨学課・小河光治記者（1月27日記）

教育方針を180度変革

1）　大学奨学生の採用面接試験を従来の減点主義から加点主義に180度転換

景気低迷とそれに伴う就職困難の時代が続く中、「昨今の若者は著しく自信喪失している」という事が、様々な統計や識者の指摘によって浮き彫りにされています。貧困の連鎖から抜け出す実力をつけさせるために「自分の頭で考え判断し行動できる人間作り」をめざして努力してきた本会にとっても、こうした自信のない若者たちに、どのように対処していくべきかは大きな課題でした。

欧米諸国でも①エクス・ドゥカーレ教育法から、②エデュケーション教育法に変える流れがあると聞きます。前者は「子どもには元々成長すると悪くなる性格や癖等があり、それを子どもの時から躾や体罰的なもので矯正する必要がある」といういわば性悪説であり、後者は「子どもの良いところをできるだけ発見し、それを伸ばす教育法」です。

日本も今までは「エクス・ドゥカーレ法」に近く、とかく「子どもの欠点を探しそれを戒める」というお説教式の教育が主流であったように思います。あしなが育英会は、そのような教育が「伸び伸びとものが言えない、自信も持てない」人間を作る一因ではないかと考え、まずは大学奨学生の採用面接試験を従来の「減点主義」から「加点主義」に180度変えることにいたしました。この方針のもと、2013年8月の「奨学生のつどい」で奨学生たちに「自分の良いところを見つけよう。自信を持とう」と呼びかけたところ、奨学生たちの表情がみるみる明るくなり、率直にものを言い、大胆に行動する中で、瞳が輝きだしたのが大変印象的でした。

2）　インターン生との交流がもたらしたもの

2013年6月から2～3か月間、英米からオックスフォード大、プリンストン大、ニューヨーク大、コロンビア大、ヴァッサー大など超一流大学の学生たちをインターン生として招きましたが、彼らとの交流は本会と奨学生たちに大きな影響を与えました。正直申し上げて、彼らには

代々積み重ねてきたような知性と品格が感じられ、比べて日本の学生は非常に幼く見えたという印象は否めません。しかしながら、彼らとの交流を通して、奨学生たちの態度に生じた変化には驚くべきものがありました。インターン生は奨学生に対して本会の新しい教育方針に沿うかのように「褒めて育てる」という態度で臨み、シャイなはずの奨学生の方もそれに呼応して積極的に学ぶ姿勢を見せたのです。奨学生たちが彼らから学んだのは、英会話・コミュニケーション力・発表力だけでなく、堂々としている彼らを見ることによって、自我の確立の大切さを肌で感じたことが一番大きかったように思います。

さらに驚いたことは、このインターン生たちのリーダー格であるザン君とサイモン君（共にオクスフォード大）、トラヴィス君（ニューヨーク大）が2014年6月から、あしなが育英会で働きたいと申し出てくれたことです。以前あしなが育英会がウガンダから日本に送り出した早大生のマトブ君、ICU生のクリスティーンさんも、ウガンダの後輩に大学の素晴らしさを教えたい、そのためには本会の掲げる「アフリカ遺児教育支援百年構想」（※）のために働きたい、と言ってくれていることを考え合わせますと、人のために役立ちたいと考える若者の純粋な「志」に感動すると共に、世界の超一流大学の卒業生が働きたいと言ってくれるほどに、NGOとしてのあしなが育英会に魅力があるということを、大変嬉しく思いました。

2013年の経験を踏まえ、2014年のインターンシップ制度はさらに充実したものにし、世界の優秀な若者と日本の若者を切磋琢磨させる中から、国際的に活躍し、弱者のために正義の旗手となっていく若者を育てることを目指したいと思います。

昨今の世の中の、生涯をかけて働く場所が見つけにくい状況に、世界の若者も日本の若者も悩んでいることでしょう。青少年に明るい目標を立てさせてやれる世の中にしていくために、本会も一緒に悩み、行動し続けていきたいと思います。

（※）「アフリカ遺児教育支援百年構想」

サブサハラ49か国の優秀な遺児を毎年各国1名選抜し、ヨーロッパ、北米等の一流大学へ留学させ、アフリカのリーダーに育てる制度。究極の目的は最貧地域サブサハラの貧困削減。

3）　奨学生のつどいの流れを大きく変えた大学奨学生等の「潮来（いたこ）のつどい」

前述の「減点主義」から「加点主義」への大変革実践の場は9月1日から4泊5日、潮来市で開催した「大学奨学生等のつどい」です。私は学生たちに、ときにはダンスを交えて笑いを誘いながら「親を亡くすことはこの上もなく不幸だ。だからといって夢も希望も捨てて勉強しないというのは甘えにほかならない。親が亡くなるということと、君自身がやけになって自分を失ったりこの世にかけがえのない存在であることを忘れてしまうこととは、まったく別物だ。遺された君自身はもっと自分を大切にして生きるべきだ。そして、つどいのテーマ『志高くＷＯＲＫ　ＨＡＲＤ』こそ各人が自立し自分の頭で考え行動して自分の道を切り拓く鍵なんだ」と呼びかけました。一瞬にして彼らは目から鱗がとれたように溌剌と積極的に行動し出し、あしなが海外研修への申し込みが殺到しました。さらに、つどい後に行われた「あしなが学生募金」や「Ｐウォーク」への参加姿勢も驚くほど明るく前向きでした。先細りの日本だからこそ、若者が元気で主張する社会をつくらなければなりません。その第一歩となった“潮来のつどい”で確かな手ごたえを得ました。あしなが新時代のリーダーを育てるためにも、この方針を貫いていきたいと思います。

8月に全国11会場で開催した「高校奨学生のつどい」でも「志高くＷＯＲＫ　ＨＡＲＤ」を

統一テーマに全力を注ぎました。特に史上初のインターン生の参加で、高校生たちは「内向き」から「外向き」に大転換しました。彼らを厳しい時代にサバイバルできる人間に導くためにはまだまだ課題は山積していますが、今後もインターン生の参加を積極的に推進するとともに、「大学奨学生等のつどい」をきっかけに成長したリーダーをより多く投入し、高校生のセルフエスティーム（自尊感情）を高め、人生に果敢に挑戦する人材へと導いてまいります。

3月13日仙台、3月20日東京にて、コラボコンサートを開催

あしなが育英会とヴァッサー大学（米国ニューヨーク州）は2014年の3月、アフリカ、アジア、北米、ヨーロッパの四大陸を音楽で一つにする特別共同公演「世界がわが家」を開催します。ウガンダの現地NGO「あしながウガンダ」が運営する“寺子屋”で基礎的な教育を受けている子どもたちによる歌と踊り、ヴァッサー大学コーラス部（聖歌隊）のメンバーによる合唱、2011年3月11に発生した東日本大地震・津波によって壊滅的な被害をこうむった東北地方の子どもたちによる伝統的な和太鼓演奏が披露されるこの公演を演出するのは、「レ・ミゼラブル」や「ニコラス・ニクルビー」などのブロードウェイ・ミュージカルを演出しトニー賞を受賞した有名な英国人演出家、ジョン・ケアード氏です。

この空前のイベントは、2012年に刊行100周年を迎えた小説「あしながおじさん」の著者ジーン・ウェブスターの母校であるヴァッサー大学と、今も読み継がれているその小説から名前と着想を得た「あしなが育英会」の間に強まる協力関係のもと、両者が踏み出す新たな一歩を象徴するものです。今年は、1914年にブロードウェイでミュージカル「あしながおじさん」が初演されてから、ちょうど100年になります。

本公演、「世界がわが家」は、あしなが育英会が現在取り組んでいる親を亡くしたアフリカの子どもたちを支援するプロジェクト（アフリカ遺児教育支援）に関連していますが、「すべての子どもに教育を（教育の機会の大切さ）」というあしなが育英会とヴァッサー大学が共有するより壮大なビジョンにもとづいて行われます。同時に、東日本大震災で亡くなった方たちの鎮魂と被災した方々を少しでも励ましたいという思いも込められています。

他では見る事のできない素晴らしいエンターテイメントと感動が詰まったこのイベントにぜひ足をお運びください。入場は無料です。お申込みについては同封のあしながニュースをご覧ください。

ウガンダのエイズ遺児ヒルダさん、名門スミス・カレッジに合格

ウガンダの首都カンパラの郊外ナンサナ村（現在は市）のあしながウガンダで猛勉強してきた遺児の1人ヒルダさんが、米国の女子大最難関大学の一つスミス・カレッジに合格しました。それのみならず大学からフルスカラシップ（学費及び生活費）をも受けられることになり、2014年9月の入学を予定しております。合格の一報に接したヒルダさんは「信じられません。あしながさんのおかげです。会ったこともない私のような学生を応援してくれて、本当にありがとうございます！アメリカではあしながの大使として一生懸命勉強します。」と決意を込めて語りました。

これまでウガンダ等から本会の留学生制度により40人が主として日本の大学に留学しましたが、8年目にしてついに米国の難関大学にも合格者を出したという快挙です。あしながウガンダで留学生

の育成に力を注ぎ続けた沼志帆子・山田優花両職員と現地スタッフ、ナマクラ・ダイアナさんの長年の労をねぎらいたいと思います。「志高く WORK HARD」するところ前進を阻止するものは何もないことを見事に証明してくれました。

また、これは同時に、当会がかねてより進めてまいりました「アフリカ遺児教育支援百年構想」が力強く歩み始めたことを意味します。彼女に続き、次々とサブサハラ各国から遺児たちが英米の大学に進学できるようになれば、「百年構想」の「百」を「五十」とか「三十」と塗りかえる、嬉しい事態も予測できます。やがては留学した遺児たちが国のリーダーに育ち、母国の貧困の連鎖を断ち切るために活躍してくれることでしょう。ヒルダさんこそ、百年構想の第一歩。新しい運動の象徴と言えます。彼女の血の滲むような努力と、入学を成し遂げた強い意志に心から敬意を表したいと思います。ヒルダさん、ありがとう！君の作った新しい道を多くの後輩が歩み続けるよ！

おわりに

今回はご支援者のみなさまにお伝えしたいことが数多くあり、どれも削ることができませんでしたため、長いご報告になりましたことをお詫び申し上げます。

林田の報告にありましたように、東北の被災者や遺児たちは、3年目を迎えてもまだまだ辛い状況にあります。我々はこのことを常に念頭におき、心のケアを含め、みなさまと共にこれからもずっと彼らに寄り添ってまいりたいと思います。

「子どもの貧困対策法」「加点主義への教育方針の変革」「アフリカ遺児教育支援百年構想」・・・遺児たちを救おうとみなさまがお寄せくださった温かいご寄付に込められた願いを最大限に実現するために、本会はこれからも真剣に遺児たちに向き合い、彼らのためにベストな道を探し続けます。

寒さ厳しき折柄、みなさまにはくれぐれもご健勝であられますことを心よりお祈りし、感謝のご報告に代えさせていただきます。